

## 1. 題目設定の理由

これまで学校教育は、その時々において学力の低下が指摘されてきたが、21世紀を迎えた今日、その低下は著しいものとなってきている。

このような現状を打開し、これからの知識基盤社会を生きていくために必要な学力を習得させ、社会が変化しても自らの力で生きていくための基盤づくりを学校がどのように取り組んでいくべきかを研究してみたい。これが題目設定の理由である。

## 2. 論文構成

はじめに（本論文の概要）

### 第一章 今日の教育的課題としての基礎・基本

第一節 新学習指導要領による基礎的・基本的な知識・技能の習得・活用の重視

第二節 振り子論（学習指導要領の歴史的変遷）と基礎・基本

### 第二章 モジュール学習を通じた基礎・基本の定着

第一節 基礎・基本の充実

第二節 授業時数の確保

第三節 授業時間の弾力化

### 第三章 モジュール学習を活用した授業実践

第一節 研究開発校（広島県尾道市立土堂小学校）における取り組み

第二節 学校の概要

第三節 モジュール授業

第四節 授業内容

第五節 授業実践の成果

### 第四章 習得型教育と探究型教育

第一節 二項対立的学力観から構造的学力観へ

第二節 モジュール学習を通して探究型学力を育む可能性

## 3. 論文の概要

### 【第一章】 今日の教育的課題としての基礎・基本

第一節では、基礎的・基本的な知識・技能の習得・活用の重視する背景として、PISAの調査などから、日本の子どもには読解力や記述式の問題に課題がみられることを指摘したうえで、知識を単に知っているという段階からそれを活用できる段階へと学力の質を高めていくことの必要性を論述している。

第二節では、「基礎・基本」がこれまで学習指導要領の中でどのように捉えられてきたのかをみていくことで、これからの学校現場ではどのような学力を育てていかなければならないのかを考察している。

### 【第二章】 モジュール学習を通じた基礎・基本の定着

一節では、基礎的・基本的な知識・技能を児童生徒に定着させるための指導方法として、「繰り返し指導（反復学習）」や「スパイラルの学び」を取り上げている。（スパイラルの学びとは、螺旋を描くようにすでに学習した内容に立ち返り反復しながら、なだらかに学習内容を進めていくイメージの学習の仕方のことを意味する。）新学習指導要領では、反復学習などの繰り返し学習といった工夫による「読み・書き・計算」の能力の育成を重視することを示したからである。

二節では、一節でみてきた「繰り返し指導（反復学習）」や「スパイラルの学び」行っていくための時間を確保していく意義について述べている。

第三節では、習得の時間を作るための方策として、授業時間を弾力化するということを述べている。授業時間を弾力化し、繰り返し指導などを効率的・効果的に行っていくために、帯時間割やモジュールを用いた短時間の学習場面を活用する時間割について考察していく。

### 【第三章】 モジュール学習を活用した授業実践

この章では、基礎的・基本的な知識・技能の定着を目標として、かつて研究開発学校の指定を受け、独

自の実践を行っている広島県尾道市立土堂小学校を取り上げている。この学校では毎週火、水、木曜日の1時間目の45分を1モジュール15分として、合計3モジュールで基礎・基本の定着を目指すモジュール授業を行っている。第一節は研究開発学校について、第二節では学校の概要を述べている。

第三節では、土堂小学校が行っているモジュール授業について考察をしている。土堂小学校では、「基礎・基本の定着は読み書き計算の反復や主体的に学ぶ学習方法の習得などによって可能になる」という考えのもとモジュール授業を取り入れている。また、ただ単に機械的な反復を行っていくのではなく、スピード・テンポ・タイミングを重視している点も特徴の一つである。

第四節ではモジュール授業の内容を考察している。土堂小学校では、音読、百ます計算、電子黒板をつかった反復学習、タイピング、そろばんなどを1モジュールとして取り入れている。国語科的な内容（音読など）を1モジュール、算数科的な内容（百ます計算など）を1モジュール行うことは全校共通であるが、残り1モジュールは各担任の裁量に任されている。

第五節では実践の成果を考察している。平成20年度の全国学力テストでは、全国の知識・活用の双方において全体平均を15ポイント上回っている。また勉強だけではなく、尾道市子ども運動会や音楽コンクールといった芸術やスポーツにおいても好成績を収めている。

#### 【第四章】 習得型教育と探究型教育

一節では、これまでの基礎・基本（習得型）と自ら学び自ら考える力（探究型）という対立的な考え方（二項対立的学力観）をあらためたうえで、二つを総合的に育成していく構造的学力観へと考え方を変えていく必要性について考察している。構造的学力観とは、習得→活用→探究という三層からなる構造あるいは積み上げを意味しているが、実際の場面においては截然と分けられるものでも一方的に積み上げられるものではない。習得・活用・探究それぞれ相互に行きつ戻りつしながら力が貯えられていくのである。

二節では、モジュール学習を通じて定着した力を探究型へどのように結んでいくことができるかについて考察している。自ら課題を見付け自ら考え、解決したことを発表していくためには、基礎・基本（読み・書き・計算）の力がなくして行うことはできない。モジュール授業は探究型学力を支えるための基礎・基本を育むことのできる効果的な取り組みであることがこれまでの考察により分かってきた。また探究型学力の育成のためには調べたり考えたりというように、じっくりと時間をかけて活動を行っていくことが望まれる。モジュールという考え方が、探究型の授業（総合的な学習の時間）においても効果的であることを併せて述べている。

#### 【今後の課題】

児童に基礎・基本を定着させるためには、①定着させるための指導方法を考えること②方法を行うための時間を確保することが大切であるということ考察してきた。そして③定着させた学力をその後どのようにいかしていくのかが各学校には求められてくる。

探究型学力の育成のためには土台となるべき基礎・基本が定着することが必要であることを考察したのだが、定着した学力（基礎・基本）をどのようにして活用・探究へとつないでいくことができるのか、今回の論文ではあまり触れることができなかった。「習得」・「活用」・「探究」というそれぞれをどのように結び付け、バランスよく育てていくことができるのか更なる考察をしていくことが今後の課題となる。

#### 4. 主要参考文献

- ・野原明，2006，『教育課程の改革—その基本的方向』，（株）教育開発研究所
- ・文部科学省，2008，『小学校学習指導要領解説 総則編』，（株）東洋館出版社
- ・土堂小学校，2009，『土堂小教育 平成21年度』
- ・寺崎千秋，2004，『小学校学習指導要領改訂の解説と展開』，（株）明治図書出版